07

News Letter

結晶母

Terra Renaissance

いま、たしかなこと。

特集

理事長・小川真吾、創設者・理事 鬼丸昌也による特別対談

企画／啓発事業部長 小田起世和

コロナ禍、生命と暮らしを見つめて

——困難の時代を、私たちは、どのように生きるのか。テラ・ルネッサンス理事長の小川と、創設者・理事の鬼丸との対談から、コロナ禍の2020年を振り返りました。

鬼丸　世界がコロナ禍に見舞われた今年、テラ・ルネッサンス（以下、テラルネ）が「新型コロナウイルス対策緊急支援プロジェクト」をスタートさせたのは3月末。当初の目標を大きく上回り、2千万円を超える寄付をお寄せ頂きました。

4月は、まさに国内に不安が大きく広がっていた時期。それにもかかわらず、私たちが支援するアジア・アフリカの人々に思いを寄せて頂き、本当に感動しました。

小川　アフリカもそうでしたが、日本の皆さんも間違いなく大変な状況にあったと思います。その中で、多大なるご寄付を頂いたおかげで、私たちも迅速な支援を行うことができました。心からお礼を伝えたいです。

これまでアフリカで取り組んできた活動は、大きく分けて2つ。ひとつは感染予防です。まずは、千か所以上に及ぶ手洗器の設置、7万枚強の啓発ポスターの配布・掲示を行いました。また、病院のコロナ対策に関するサポートにも入りました。

もうひとつが、コロナの影響で経済的にひっ迫した方たちへの生活支援です。5千人以上の方に、食料や衛生用品などを緊急支援させて頂くことができました。

鬼丸　一見すると、直接的には関係ないように感じられる海外の国に、どれだけのご支援を頂けるのか、実は一抹の不安もあったんです。しかし非常時においても、他者のために役立ちたいと思ってくださる方が多数いらっしゃったことに心から感謝します。

小川さんはウガンダ・コンゴ・ブルンジの支援事業を統括していますが、現地での支援にあたり意識してきたことは？

小川　最も大切にしてきたのは、「受益者の方たちができること」を活かす形で支援することです。

今回も、緊急時には物資供与を行いましたし、今後も続けますが、「ひとり一人に未来をつくる力がある」というテラルネの理念を常に第一に考えたいと思っています。

具体的な支援の例を挙げると、ロックダウンにより、卒業生たちの洋裁店も営業停止を余儀なくされ、本来であれば、自立できていた彼女たちの仕事が一気になくなったのです。

そこで、私たちはマスク作りの仕事を提供し、自活できるよう支援しました。今までに4万枚を制作し、医療従事者や難民の方々に無償で届けています。

これは一例で、他にもさまざまな形で、現地の皆さんが生計を立てるための支援を提供させて頂いています。

鬼丸さんが、3月以降、日本での活動を通して感じてきたことは何ですか？

課題が可視化された今こそ取り組むべきこと

鬼丸　今回、世界中で、弱い立場に置かれた方たちの存在や課題が可視化され、今まで以上に、リアルに見えるようになったと思っています。

コロナによって、生命や暮らしが脅かされている状況は世界共通です。日本でも、仕事を失ったり収入が減ったりして、十分な食事や教育が得られない人が出てきている。

この危機に、人類がどう取り組むのか。同時に、一人ひとりがどのように生きていくのかが、今問われていると思います。

小川さんも、支援の現場で多くのことを感じていると思いますが、いかがでしょう。

2020年3月以降、小川(写真左)は感染の広がるアフリカに残り、緊急支援を継続しています。今回、帰国が叶わなかったため、鬼丸(写真右)との対談をオンラインにて実施しました。

小川　アフリカは日本と違って、エボラ出血熱やマラリア、結核、貧困や紛争など、複合的なリスクにさらされています。

ですから、政府のコロナ対策によって「副次的なリスク」が発生する場合があると、今回そう気づきました。

たとえば、ロックダウンによる交通制限で病院に行けず、コロナ以外の感染症で亡くなる人がいる。また、親の収入減によって栄養状態が悪くなった子どもたちが、予防または治療可能な病気で命を落とす。こんな状況が多く見られたのです。

この半年、ウガンダのコロナによる死亡者は約100名。一方、マラリアと結核による死亡者は、それぞれ推定5千名。言うまでもなく、一番被害を受けるのが、脆弱な立場に置かれた人たちです。

そのような状況で全体を見ながら、どのリスクに対応していくのかを、客観的、総合的に判断することが大事だと痛感しました。同時に、長い時間軸の中で、支援を受ける方たちの生命と暮らしに、どんな影響が出るのかを評価することも、大切だと感じています。

鬼丸　弱い立場の人が通常の暮らしを行うのが難しくなっている状況は、日本も同じです。

そこで今回、テラルネでは新

認定NPO法人D×Pと業務提携し、10代向けのLINE相談事業への資金拠出を実施。それぞれの知見を共有し、双方の事業成長を促進させることで、コロナ後の平和で公正な社会の実現に貢献します。

しい試みを始めました。認定NPO法人D×Pさんが行っているLINEを活用した若者の悩み相談に、資金提供させて頂いているのです。

日本社会における今の状況の中で孤立し、絶望を感じている若者が多くいます。彼らは、自らの可能性を信じられなくなり、時には自死も選ばざるを得ない状況にあったりする。しかし、そういった若者に対する支援が、十分に行き届いていない現状がありました。

そこで、若者への支援を続けてきたD×Pさんと提携することで、必要に応じて、行政サービスの紹介や食糧支援、一時金の給付などを行い、適切な援助ができればと思っています。

これは、国内外を問わず、本来取り組むべき課題に、果敢に取り組みたいと考えて始めた支援です。元々考えていたことではあるのですが、お互いに支え合う必要のある今だからこそ、スタートできたと思っています。

困難の中で互いに助け合う人たちから学ぶ

小川　苦しい状況にあって、支え合うことの大切さに気づいたという意味では、ウガンダでも日本と同じような状況が起きています。

実は、先ほどお話ししたマスク作りをしている女性たちが、自分の知り合いにマスクを作ってプレゼントしたり、他の洋裁仲間にマスクの作り方を教えたりしているのです。もちろん、彼女たちの収入にはなりません。

普通は、大変な状況になればなるほど、人は自分のことしか考えられなくなるものかもしれませんが、彼女たちは他者に対して思いやりをもち、役に立ちたいと考えている。そんな場面が見られたことは、今回とても印象に残りました。

支援する私たちから見ると、彼女たちは紛争の被害を受けた弱い立場にあり、サポートが必要な存在だと捉えがちでした。ですが、15年支援を続け、その歩みを見ている中で、考えが変わりました。

彼女たちは、困難や逆境に対して、とても柔軟にアイデアや能力を発揮し、また他者に対する思いやりを見せてくれる。今回も、人間のもつ強さやレジリエンス（回復力）を、改めて見せてもらった思いがします。

私自身、さまざまな課題に直面する日々ですが、彼女たちからエネルギーを貰い、学ばせてもらっています。

鬼丸　その話を聞いて、人類全体がコロナの影響下にあっても、私たちは、そこに立ち向かう力、レジリエントな力を、それぞれがもっているのだなと感じました。

ただ、その力を発揮できない状況にあるのであれば、テラルネが適切な支援を提供していく必要がある。このことも確認できた気がします。

加えて、この状況から、私たち自身が生きていくためのヒントも多く学べるのではないかと思います。

急激な変化が求められる今、生きづらさを感じている人は多くいるはずです。しかし、人は生きていく価値があるし、生きねばならない。変化に対応しながら、しなやかに立ち振る舞っていくことが、今もこれからも重要です。

その時、私が思いを馳せるのは、アジア・アフリカでサポートさせて頂いている皆さんのことなのです。彼ら彼女たちは、過酷な経験を経て、さまざまな苦しみや悲しみを抱えながら、それでもなお、生き抜いてきた。

また、この状況下で弱い立場に置かれているけれど、決して弱いだけではなく、お互いに支え合いながら、しなやかに課題に立ち向かっている。

彼らや彼女たちの、そんな生き方を伝えていくことも、また私たちの責務ではないかと考えています。

「今あるもの」を活かし、前進し続ける

小川　「しなやかさ」という言葉が出ましたが、活動を続ける中で、状況に対して柔軟に対応できている人には、ひとつの特徴があることに気づいたんです。

それは、「収入源を多様化している人」です。社会復帰プログラムを終えて独立後、うまくいく人もいれば苦戦する人もいる。また、いい時期もあれば、そうでない時期もある。

その中で困難に適応して、比較的安定しているのは、複数の収入源をもっている人です。

彼らは、自分の技術や知識を活かすだけでなく、家族や親戚、友人などとのつながりも上手に築いています。

それらをうまく活用して、技術を学んだり、新しい収入源を手に入れたりしている。また、失敗しても、すぐ新たなことにトライしている。

身近にあるものをうまく組み合わせて、問題に対処したり新たなものを創造したりすることを、人類学用語で「ブリコラージュ」と言います。ありあわせの材料で料理を作るようなプロセスですが、それを繰り返し、周囲の力も借りながらすばやく変化に対応していく。そのサイクルを回せている人たちが、結局は

うまくいっているし、レジリエントな力をもっている。こう感じています。

鬼丸　なるほど。その生き方は、今後、非常に重要になってきますね。

小川　はい。その場しのぎのように見えるかもしれませんが、私たち日本人も学ぶところは多いと思います。ひとつの仕事や収入源、あるいは、特定の人間関係や生活スタイルにこだわらず、自分のもつ多様な能力や可能性を大事にすることがポイントだと思います。

　最近、嬉しいニュースがあったんです。コンゴで、性暴力を受けた女性の支援として、パイナップルジュース作りに取り組んでいたのですが、コロナの影響で大打撃を受けました。ところが先月から、売上が急激に伸び始めた。

　競合していたジュースなどの清涼飲料水が供給されなくなり、地元の材料で作れる彼女たちのジュースの需要が一気に上がったからです。

　元々、地元の原料を使い、地元で生産することを指針にしてきたプロジェクトなので、その姿勢が功を奏し、彼女たちのビジネスと暮らしが守られたわけです。

　人も物もグローバルに移動し、消費活動が行われていた時代から、身近にある資源を地域の中で循環させていく社会へ。それが、地域レベルでレジリエントな社会に近づいていくキーワードになると、この取り組みから学びました。

鬼丸　たしかにその通りですね。これからは、個人においても地域においても、自分の内側にある可能性や資源を粗末に扱わず、十二分に生かしていくことがとても大事になってくると思います。

　仮に、いろいろな課題や悩みを抱えていたとしても、今あるものにきちんと注目して、「自分にはできる」と思える勇気を育んでいくことが、困難な状況を生き抜いていくために必要になる。テラルネでも、一人ひとりが地域の中で勇気を育んでいけるよう、さまざまな活動を通してサポートしていければと考えています。

　来年、団体設立20周年を迎えるにあたり、テラルネのスタッフ一同、私たちが目指す「すべての生命が安心して生活できる社会（＝世界平和）の実現」のために、勇気をもち続け、時代を切り開いていきたいと改めて思っています。

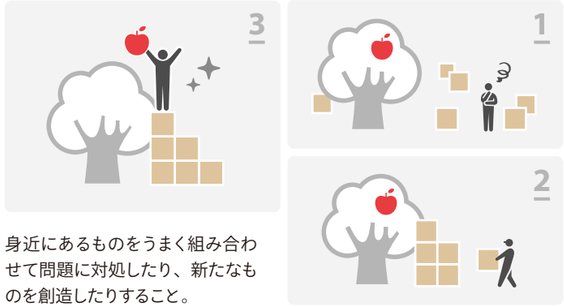
構成／江藤ちふみ

今回の対談内容を、
＼＼ 動画でご覧いただけます！ ／／

テラルネッサンス　youtube　検索

Point!

ブリコラージュ …とは？



身近にあるものをうまく組み合わせて問題に対処したり、新たなものを創造したりすること。

支援者メッセージ

命と向きあう、宗教者・医療者の声

松緑神道大和山
教主
田澤 清喜さん

「平和は一人ではできない。しかし、一人が何かをしなければ何もできない」

　今ある時間を、自分にしかできないこと、自分の可能性を考える時間に転換したいと考えます。何かをしなければいけないプレッシャーではなく、何かをしたいと思う希望を確認し、もち進み続けたいと願います。

　そのためには、行動することです。

　行動するときに心にしていることが「仕合せ」です。個人の幸福も大切なことです。そこに、目的を一にする自分以外の方々に、自分を取り巻く環境に、そして見えざるものに、仕える心と祈りを加えて行動することです。仕え合わせる相手がいて、仕えようとする祈りや思いがあって、積み重ねられていく物事の結果は「仕合せの結晶」と信じます。

　テラ・ルネッサンスの行動は、その証です。共に行動し続けましょう。

三菱京都病院
腫瘍内科
緩和ケア内科医長
平本 秀二さん

　私はがん患者さんの治療と終末期を支える立場にいる医師です。がん患者さんはコロナ禍でも治療中断ができません。日々の不安の中、頑張って治療されておられる患者さんをみると、逆に医療者が励まされることがよくあります。

　コロナ禍は病院で亡くなりゆくがん患者さんとご家族、友人との最後の時間を阻んでおります。そのようなつらい状況の中でも、患者さんはその命を最期の瞬間まで燃やし続け、ご家族や我々が生きる希望をも支えて下さっています。このように私は命を支える立場にいながら、コロナ禍においても「生きること」の大切さを患者さんから直接教えられていると実感しております。「生きること」を支えるテラ・ルネッサンスには、ご支援をさせていただくことで自身の「生きること」も支えたいと思っております。

ハンさんの家庭菜園。豆やヘチマ、空芯菜などを栽培しています。

活動レポート　アジア事業マネージャー　江角泰

新型コロナの影響を、しなやかにかわす

カンボジアのバッタンバン州カムリエン郡における障がい者100世帯への生計向上支援は、4年目に入りました。今年は新型コロナへの懸念もあり、従来は集まって実施していた野菜栽培の訓練を中止しています。このため、各世帯を訪問調査する際に野菜の栽培方法を記した紙と野菜の種を渡すことで代替することにしました。

農村部に住む村人たちは新型コロナに加えて水不足の影響もありましたが、雨季に入った5月末の時点では、ほとんどの世帯で家庭菜園での野菜栽培を再開することができました。そのうちのひとりであるハンさんは、自家消費にくわえて販売用や近所へのおすそ分けなど、十分な量の野菜を栽培することができています。

これまでサポートしてきた家畜飼育や家庭菜園は、障がいのある方でも取り組めるように、できるだけ広い農地を持たず、家の周辺に限った活動でした。新型コロナで自宅待機が推奨され、タイとの国境も閉鎖されたなかで、野菜栽培や家畜飼育で食料を自給し、複数の収入源を持つ世帯は、大きな影響が出ませんでした。

ハンさんの事例はお金に換算すると僅かかもしれません。ですが、出稼ぎによる収入が減少する人もいる状況のなか、テラ・ルネッサンスの目指す「自立した生活」を実現してきた好例でもあるのです。

活動レポート　アフリカ事業サブマネージャー　古岡繭

感染予防のために、正しい知識を

6月、ブルンジでは緊急支援の一環として、政府が計画している医療従事者向けの新型コロナ対策の研修を行いました。

都市の病院では、新型コロナの予防方法や患者の治療方法について研修を受けた医師もいましたが、地方の病院ではそういった研修の機会の提供が遅く、スタッフも対応に不安がありました。

そのため、この研修を受けてもらうことで、予防方法に加え、今後地方で感染者が出てきたときに都市の病院に移送するのではなく、地方の病院でも適切に対応することを目的としています。

今回実施した研修では、28名の医療従事者が参加し、専門家から感染予防・拡大予防・治療に必要な知識について学びました。研修に参加した保健所の職員は次のように話してくれています。

「適切に手を洗うことや、新型コロナの感染疑いがある患者への対応の方法など、様々なことを学びました。これまでテラ・ルネッサンスが学校などに手洗い設備を配布してくれましたが、それらを適切に扱う知識が不十分な状態でした。これからは私たちが、市民の皆さんがウイルスから身を守ることができるように啓発をしていきます。」

今後は、これまでの手洗い設備の設置に合わせ、このような正しい知識をより多くの人々に伝えていく啓発活動も継続していきます。

現地の医療関係者たちは、患者への適切な対応を学びます。

活動レポート

啓発事業部インターン 福井妙恵

コロナ禍がもたらした、新たなつながり

テラ・ルネッサンスの大切な柱である講演事業。私たちは講演を通してたくさんの方とご縁を結び、ともに世界の現状や平和について考えてきました。そんな、みなさまとの「つながり」の場だった講演やイベントも、新型コロナの感染拡大の影響を受け、今年の上半期は軒並み中止や延期が続きました。しかし、コロナ禍で光が見えにくい状況だからこそ、「私たちには伝えるべきことがある」という想いのもと、私たちは新たな試みを始めました。

それは、インターネットを活用したオンラインでの講演です。これにより、海外のスタッフが直接現地の様子を報告することができるようになりました。そして、海外在住の方や子育て中の方など、以前は会場に来ることができず参加を断念していた方の参加や、自宅から家族で講演を聴いていただける機会も増えました。これは、オンラインだからこそ生まれた新しい「つながり」です。

もう一つの新たな試みは、「テラ・ルネッサンス　アカデミア」という有料オンラインセミナーです。NPOなどソーシャルセクターで働く方々を対象に、私たちが培ってきたファンドレイジングの知識やノウハウをお伝えしました。世界平和の実現に向けて、より多くの方々と協働するための大切な一歩になりました。

私たちの活動理念である、「ひとり一人に未来をつくる力がある」の重要性をコロナ禍で再認識し、その歩みを進めた2020年。

そして、9月頃から徐々に対面での講演も実施できるようになり、現時点で今年度の講演はオンラインと対面を合わせると90回を予定しています。これからも講演を通して多くの方々の「平和の芽」を育んでいきたいと思います。

「テラ・ルネッサンス　アカデミア」、オンライン配信の様子

栗田 佳典

啓発事業部　講演企画・支援連携担当

「Keep challenging」　当会が掲げる行動規範のひとつです。2020年の講演、イベント事業はまさしくこの言葉を常に意識し、どのようにしたら講演やイベントを開催できるのかを主催者の方々と相談した毎日でした。その中で、対面・オンライン・対面とオンライン、様々な講演スタイルが確立。コロナ禍での経験を融合させ、進化を続けていきたいと思います。

オンライン講演会の申込を受付中！
公式サイトより、お気軽にご相談ください。

テラルネッサンス　講演　検索

https://www.terra-r.jp/lecture.html

テラルネなひとびと

スタッフ編

藤森みな美 *Minami Fujimori*

啓発事業部 法人連携担当

こんにちは、啓発事業部法人連携担当の藤森みな美と申します。法人の皆さまからのご支援の窓口を担当しています。

最近、友人や家族から「関西弁になったねー！」とよく言われます。出身は静岡県磐田市というところで、ルーツは「遠州弁」です。しかし、大学で名古屋、仕事で東京、そして今は京都と、あちこち転々とし、さらに様々な出身地の方と日々お会いしているため、いろんな方言が混ざってしまいました。京都も4年目となり、夫も関西人のため、今はかなり関西弁に影響を受けています。ただ、関西弁と一口に言っても、地域によって異なります。いろんな関西人から日々学んでいるため、「ハイブリッド関西弁」が出来上がりつつあります。

とはいえ、面白いもので、どんなに影響を受けても、地元にいる家族や友人と話すときはするっと遠州弁に戻るのです。高校卒業まで過ごした土地で染みついたものというのは、そう簡単に抜けないものだなぁと、しみじみ感じます。一歳半の息子がいるのですが、彼はいったい何弁を話すようになるのか・・・。これからが楽しみです。

ファンクラブ編

森田 正之 さん

長野県 小学校教諭

信州・中央アルプス麓の村で小学校の教員をしています。ファンクラブ会員へのきっかけは、小川真吾さんと青年海外協力隊の訓練所同期だったことです。

帰国後20年がたちました。あの頃志した国際協力に直接的に携わる術のない今の私にとって、小川さんをはじめとするテラ・ルネッサンスのみなさまを応援することが、私の夢をつなぐことになると思っています。

ファンクラブ会員、募集中！

1口1,000円(毎月)から、活動を応援できる「ファンクラブ会員」。情報満載の**活動レポート**や、**海外からのポストカード**などをお届けしています。お申し込みはホームページ、またはお電話でも受付中。すでにファンクラブ会員の場合は**金額変更も可能**です。お気軽にお問い合わせください。

テラルネッサンス　ファンクラブ　検索

電話 **075-741-8786**（月 - 金 10時半 - 18時）

illustration by Haruka Nakajima

Terra Renaissance
News Letter.07 結晶母

発行：認定NPO法人テラ・ルネッサンス
〒600-8191 京都府京都市下京区五条高倉角堺町21番地 jimukinoueda bldg. 403号室
TEL.075-741-8786（月 - 金 10時半 -18時）FAX:075-741-7965 Mail:contact@terra-r.jp

世界の扉絵 .07

「洋裁の先生になりたい」13年前、そんな夢を語った元子ども兵のジョセフ。彼は、いま、洋裁の先生としてコロナ禍で仕事を失った人々にマスク作りを教えている。「どんなに絶望的な状況でも、人には未来を変える力がある」そんな彼の言葉が、いま静かに強く響いてくる。

理事長
海外事業部長
小川真吾
terra_ngo

2021年、テラ・ルネッサンスは、団体設立20周年を迎えます。

きたる2021年、テラ・ルネッサンスは20周年を迎え、また、「大槌復興刺し子プロジェクト」は10周年の節目を迎えます。特別な一年とすべく、創設者の鬼丸昌也を筆頭に、スタッフ一同でその準備を進めている最中です。最新情報は随時ホームページなどでもお知らせ致します。

Terra Renaissance 20th Anniversary
2021, START

News Letter.07 結晶母
2020年12月 発行

発　　行◎ 認定NPO法人テラ・ルネッサンス
発行責任◎ 小川 真吾
企画編集◎ 小田 起世和
デザイン◎ 小田 起世和　ウテナワークス（大木 美登里）

本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、
予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。

© 2020 Terra Renaissance

Terra Renaissance
ひとり一人に未来をつくる力がある
認定NPO法人 テラ・ルネッサンス

- 日常シリーズ・大槌事務所の場合 -

お歳暮用のコースターを作りました

麻の葉には魔除けの意味が！

感染予防のためマスク着用のうえ、刺し子会を実施
麻の葉柄を施した特製の布マスクも考案・販売しました